

収蔵資料紹介

かるのとう

軽野塔ノ塚廃寺出土の

湖東式軒丸瓦

湖東式軒丸瓦 一点

時代 七世紀後半

当館所蔵

軽野塔ノ塚廃寺は愛知郡愛荘町蚊野・軽野に所在し、古くから塔跡とみられる土壇や礎石状の巨石が知られていました。ほ場整備に伴う発掘調査では、金堂跡とみられる礎・瓦敷きの遺構や、門跡・寺域を限る区画溝・二基の瓦窯などが確認され、法起寺式の伽藍配置が想定されます。特筆すべき遺物として、中房の中央に一個の蓮子を配し、外区内縁の珠文・外区の圏線をもつ地域性の強い軒丸瓦の、湖東式軒丸瓦が出土しました。湖東式軒丸瓦は、愛知郡愛荘町の野々目廃寺や小八木廃寺、妙園寺廃寺のほか、蒲生郡竜王町の雪野寺跡や東近江市綺田廃寺、長浜市華寺廃寺など、湖東地域や湖北地域の渡来系氏族との関連が想定される寺院などで確認されます。古代の愛知郡では、秦氏の一族とされる渡来系氏族の依智秦氏が郡司の主要ポストを独占するほど、大きな勢力を有していたことから、軽野塔ノ塚廃寺も七世紀後半に依智秦氏が造営したと考えられます。

今回紹介する資料は、丸く突出する中房の外周に圏線をめぐらし、九個の蓮子を配するもので、外区内縁に二七個の珠文をもつ単弁六葉蓮華文の湖東式

軒丸瓦です。これとセットとなる軒平瓦は、弧文の間隔が広く、下端付近に六個の指頭圧痕をもつ三重弧文軒平瓦と考えられます。軽野塔ノ塚廃寺では、単弁八葉蓮華文や複弁八葉蓮華文など、数種類の湖東式軒丸瓦が知られています。

湖東式軒丸瓦の詳しい系譜は、よくわかっていませんが、朝鮮半島の大通寺跡や西穴寺跡出土瓦と瓦当文様の類似しており、百済の寺院との関連性が指摘されています。また、近江のほか、福井県や岐阜県、長野県からも数ヶ所の寺院跡での出土が知られており、瓦工人の移動や近江からの瓦製作技術の伝播が想定されます。

(北原 治)



軽野塔ノ塚廃寺出土の湖東式軒丸瓦・三重弧文軒平瓦 (当館蔵)